

私の青春記 戦車第一師団防空隊

香川県 井原 九八

昭和十九年四月十一日に屯営を出発しハルピンに移動、さらに列車で満州を南下し続ける。途中列車は山海関を通過し、万里の長城も望見できたが、我々は中国大陸を南下していることを知るだけでほかには一切何も分からない。やがて河南省開封駅で下車しました。

出発以来一週間の貨物列車の旅が終わりました。街は平穏で、街路には露店が並び、なつめ饅頭などが売られていました。ここは黄河流域で黄砂が強風に舞い、視界は十メートル先も見えない。でも中国の人々は平気で食物を食べています。

そこへ我々を迎えに来てくれたのは花田曹長殿で、長い髭も黄砂にまみれものものしい姿でした。部隊本部まで車両で到着し、黄河の北岸に戦闘指揮所があり、部隊長殿は我々を河原に折り敷きさ

せ次のような訓示がありました。「前方の黄河南岸に見える霸王城には名声の高い湯恩泊將軍が率いる中国軍精銳がいて、君たちの先輩は先ほどまで闘っていたのである。おっつけ君たちを迎えに帰って来る。君たちも先輩に負けぬよう立派に戦ってほしい」と述べられました。

夕日が西の空に沈むころ、先輩たちはものものしい姿で部隊本部の戦闘指示所へ帰ってきました。そこで我々は合流、本隊に仮編成され、夜の内に黄河を渡って河南作戦に突入したのです。

我が部隊の第四中隊は黄河橋上中央に陣地を敷き、友軍渡河掩護の任務に就きました。第六中隊は我々初年兵を仮編成し、夜のうちに黄河栈橋を渡り鄭州東方に向い、洛陽へと進んだのですが、最初の夕方から銃弾の洗礼を受けたのです。その後初めて敵爆撃機二機の低空偵察飛行に遭遇し、車上砲列の態勢を採りましたが、他の野砲隊等が畑や丘に散開した早さには驚いたものです。何回か対空経験した部隊だからでしょう。

また白沙鎮ではカーチスP41一機が突如襲し、日章旗目がけて機銃攻撃されました。その時、前田一等兵が戦死、搭載車の運転士が負傷するなど敵機の襲撃も次第に激しくなり、広い麦畑を一日に四回も陣地変換をする状況でした。

洛陽攻略戦は機動砲兵隊が部隊の掩護をしつつ、敵軍に包囲された洛陽を見下ろす三山村の台上に陣地を構築しました。昼間、洛陽より撃ち出す砲弾が陣地周辺に落下し気味が悪かったものですが、夕方、軍砲兵隊が敵の発射光を目標にして三発目で制圧したのは、その精度の良さに感服しました。

洛陽の十キロほど手前の竜門峡の隘路の戦闘や白沙鎮の戦闘では戦死者が出ました。この竜門峡は山全体に何万と知れない多くの石仏の彫刻があり、それを見ることが出来ましたが、戦争中であり平和になったらぜひ今一度と思っておりました。戦後に二度ほど行きましたがここは中国の観光地として有名です。

河南作戦である中国の古都洛陽に対する総攻撃は、四月二十日、火蓋が切って降ろされ、五月二十五日に陥落しました。

黄河大橋梁の守備 黄河南北岸

黄河は、その名の通り黄褐色の濁った水を満々とたたえて流れている。一見ゆるやかなようだが、その実、すごい急流で底知れぬほど深い大河である。堤防らしいものもなく南岸は一面の黄色い砂原になっている。

四方、山ひとつ見えない平坦地で、これという町もなく緑の柳の森に囲まれた小さな部落が、あちこちに点在しているだけで物寂しいところである。軍はこの地名を「黄河北岸」「黄河南岸」とよんだのである。またここは「北京」「漢口」を結ぶ京漢線の難所であり、しかも要所でもあるこの魔の黄河に、全長四キロもある大橋梁がかかっていました。

「北岸」の野原には多くの作戦資材が分散し、山積みになっている。飛行場もあるが、時たま軍

司令部の旧式な直協機が連絡のためバタバタ飛んでくる程度で、めったに戦闘機などの姿は見られない。それでも数十機が、いつも着陸しているので不思議に思い双眼鏡でよく見ると、そのすべてがトタンで作った模擬飛行機であった。

「南岸」も一面の砂原で橋梁を渡ると、そこに鉄道線路が何本も引き込まれた野戦停車場がある。そこを西に向うと、小高い丘になる。赤土の丘で北面の山裾には大小の洞窟がたくさん掘られている。この耕地を軍は「霸王城」と名づけ、我が歩兵守備隊の最前線基地となっていた。

洞窟は、その守備隊の兵舎であり武器庫であったのだ。我が部隊の任務は、この黄河の大橋梁と、この付近の戦用資材終結地の防空にあった。部隊本部は「北岸」の砂原に、第一中隊（松本隊・高射砲）は橋梁西側の野原に、第二中隊（伊藤隊・高射砲）は「霸王城」の丘の上に、第四中隊（野村隊・機関砲）は四キロの橋梁上に一個小隊ずつ三カ所に分散配置され、戦闘態勢を整えた。

ちょうど、この地方にとって一番季節の悪い時になぶつかっていた。黄河一番の黄色い砂塵が空高く巻き上げられ、太陽も赤黄色に潤んで見える。ひどい日には対岸の「霸王城」も見えなくなった。体中がざらざら埃まみれになり、河岸の砂地からくみ上げた水で炊く飯は、じゃりじゃりした黄色い飯で、辛うじて飲料水だけは濾過したものを使うことができた。

部隊本部には二棟ほど屋根が地上すれすれの土窟兵舎があり、そこは事務所で、夜はその板張りの床にごろ寝した。窓はことごとく目張りしたが、いつとはなしにすぐ細かい黄塵が積った。

部隊長も一日中、戦闘指揮所に立ち尽くし、暗くなっても入浴されず、長靴を脱ぐだけで横になって仮眠された。河岸近くの砂原に設けられた戦闘指揮所には、高さ三メートル近く櫓が組まれ、対空監視哨が立っていた。それを、ぐるりと土囊で取り囲み、その中に通信所などが開設してあった。

本部に到着して二日目に、満州から引率してきた初年兵は各中隊に配置された。第一中隊の松木中尉は走ってきて、「ご苦労様でしたなあ…」と、ニコニコしながら握手した。若干二十三歳の好男子で、真黒く日焼けし白いものは歯ばかりといった顔である。

大橋梁を初めて渡った。橋幅は四メートルぐらい、遠くで見たのとは違って高さは随分高く、見下ろすと黄河の濁流が橋脚に突き当たったものすごく渦を巻いている。形ばかり敷かれている橋板をきしらせながら、やっと第四中隊第六分隊の位置に着いた。とても長い道のりに感じたが、約四千メートルの鉄橋はまだ三分の二を残していた。

橋桁から前方に三平方メートルほどの陣地が突出し、その上に機関砲一門が据えつけられ、分隊長以下九人の砲手が一枚の天幕の下で、日差しをさけて待機の姿勢で休んでいた。どの隊員も真っ黒く日焼けし、無精髭が顔中伸び、目だけキラキラ光っていた。彼らのいる砲座の一枚板から下は、

逆巻く激流である。

何一つ身を守る施設もないこの橋上に、点々と一個小隊ずつ四キロの長きにわたって配置され、昼となく、夜となく、この狭い砲座に座居している第四中隊の戦闘員を心から痛ましく思った。どの分隊にも一人の対空監視哨が立っていて、濁る空をジッと仰いでいた。

ある小隊では射撃訓練をやっていた。橋を渡り切るとそのたもとに幕舎があり、中で中隊長の野村中尉があぐらをかいて書類を見ていた。彼も口のまわりに無精髭が伸び、体中埃で真白くなっていた。

「霸王城」にある第二中隊に着いたころは昼飯時であった。伊藤中隊長は飯盒の蓋を開けたころであった。この人も真黒い顔になり見事な髭が鼻下をうめていた。この高台の上なら四方八方視界が開け、高射砲陣地にはもってこいだと思った。「大変結構ですが、もっと結構なことがありますよ」。隊長は飯盒に集る蠅を払って蓋をした。

「実は、こうむき出しの陣地ですので、日に一、二度は必ず砲弾のお見舞いが届くんです」と言い終わらぬうちに前方でドーンと鈍い発射音がしたかと思うと、ヒュルヒュルという無気味な音とともについ五、六十メートル先の松の根元に一発落ち、灰色の土煙がバラバラと天幕を打った。急いで掩体の中に飛び込む。

このころから大部隊が、夜を日について続々と大橋梁を渡って南下していった。歩兵部隊の日もあり、騎兵が通過する日もあった。その間に輜重隊（弾薬・糧食・被服など軍需品を車で運ぶ部隊）は、せつせと資材を運んできて、広い野原にうずたかい山を築いていった。対岸の「霸王城」一帯も、人馬や車両でごった返していた。

まもなく山路秀男閣下の率いる虎兵团（戦車第三師団）が勢揃いし始めた。三十車両ほどの戦車が橋梁を渡って行った後、また二、三十車両やってきて部隊の近くに野営した。この部隊が戦車第十七連隊（渡辺部隊）であった。

北京―漢口線打通の京漢打通作戦が一斉に火蓋を切られようとしつつあった。我が部隊はこれから、この大作戦の主要な一翼である河南作戦に臨むことになった。第三中隊（機関砲）一個中隊が真つ先に「虎兵团」に配属された。

河南作戦

四月二十日。古都「洛陽」を目指す河南作戦の火蓋が切って降ろされた。「霸王城」に集結していた戦車部隊は、一斉に出撃開始。敵の砲弾は、この時とばかり黄色い竜巻の柱をいくつも巻き起こして落下しだした。かれらの重火器の音が四キロも離れた本部にも聞こえてきた。

第三中隊は少しずつ前進し始めた。双眼鏡で見ると車上の機関砲に、砲手全員が配置についているのがよく見える。無防備な車輪上に全身をさらけ出し、戦車を同行掩護するのだからたまったものではない。部隊長は時々顔を痙攣させながら、双眼鏡を降ろそうとせず、戦況を見つめていた。

眼を転ずると敵砲弾は「霸王台上」にもしきり

と落下していた。午前九時ごろ、あたりは再び静けさを取り戻した。鉄牛部隊は、もう随分前進したらしい。第三中隊も、その戦車部隊にしっかりと付き添って行ってしまった。その夜の大橋梁の上には、火の帯が続き明るくきれいだっただ。漆黒の闇に交錯する光芒は、まるで両国の花火のように、美しかった。おそらく戦車第三師団の警備隊か輜重隊が、戦車連隊に、後続して前進を始めたのであろう。十時過ぎまで灯火の行列が続いていた。

河南作戦開始以後、敵機P40の黄河橋梁の偵察は、いよいよ頻繁になってきた。空襲の公算が日を追って大となってきたので、部隊長は各隊に警戒を厳にするように命じた。

四月二十八日、予想通りきたるべきものが遂に来た。ちょうど昼飯時、望楼上の監視哨が「爆音！」と叫んだ。部隊長以下戦闘指揮所の将校、双眼鏡を手に空を仰ぐ。「各隊定位につけ！」と彦坂大尉が大声でどなる。爆音は西南から東方に

移動し接近している。爆音の大きさから相当数の重爆撃機の編隊らしい。

「第一中隊、戦闘準備完了！」。続いて「第二中隊よし」「第四中隊完了」と叫ぶ。黄塵のはれた空には薄い雲が流れていた。

「敵機発見！」誰かが叫んだ。指差す方角を見上げれば雲の切れ間からコンソリデーテッドB24の編隊が銀白色の姿を現した。その数二十数機。高度四千メートルくらい。そのやや後方を低く、これまた二十数機のカーチスP40が護衛についている。

誰かが「航路角、ゼロ」と言う。航路角ゼロとは、敵機が我に向かって直進してくることである。「霸王台上」の第二中隊が砲撃を開始、同時に第一中隊が射ち上げた。二群射、三群射。ひっきりなしに射撃が続く、上空に数多くの弾丸が灰色の火を噴いて炸裂した。

B24は編隊を崩さず、弾倉を開き、大橋梁に対して爆弾を投下し始めた。爆弾は黄河に落ちては

水柱を上げ、両岸に炸裂しては黄塵を吹き上げた。まさに絨毯爆撃である。さらに近くに落ち始めた。

戦闘指揮所の二、三メートル先に落ちた一発が熱い爆風と土砂を頭上から振りかける。掩体内に伏せた部隊長もころもち腰を落したが、すかさず、「第一中隊！ 弾丸が低い！」とどなった。敵は悠々とその爆弾のすべてをたたきつけて西方に消えて行き、爆撃は部隊本部付近を最終点とし、橋梁を遠く離れて行った一発だけ橋梁東端の橋脚間近に落ち、直径五メートルほどの大穴を明けた。橋は無事だった。

次々に各中隊より戦死者、火炮、観測具等の異常の電話報告が入る。橋上の第四中隊は、さぞ恐ろしい思いをしたことであろう。若菜隊長より「すごかったのう、こちらから見ていると本部付近は、火炎が立ち込め火の海のようなたぞ。誰も怪我はなかったか」と早速電話がかかってきた。

幸いにして橋梁も戦用資材集積地も無事だった

が、我々は今日の不手際な緒戦を深く心に恥じ、一夜明ければ天長の佳節だというのに、皆首うなだれ、暗いローソクの灯の下で進まぬ夕食の箸を取った。

五月一日、続いて部隊主力に前進が命ぜられた。鄭州東方の中卒の敵を追い散らしていた第五中隊（機関砲）と第六中隊（機関砲）が急遽呼び戻された。両中隊とも泥と埃にまみれ、どれが誰やら見当がつかぬほどだった。

その真夜中に両中隊は、戦車師団の後を追って進発して行った。五月十一日、「おい、起きろ」と誰かがしきりに揺り起こす。「何んだ今ごろ」起したのは彦坂大尉である。表情は穏やかだが、何か腹立たしそうにプリプリしている。その朝、彦坂大尉は眠たい目をこすりこすり、「竜門街」渡河点付近の偵察に出かけた。

大村中尉も得体のわからぬ高熱が出て、昨夜はほとんど眠っていない様子だったが、連れて行ってくれと、聞かないため乗用車に乗せて出発した。

名にしおう「竜門の險」にほど近い地点で、なだらかな丘陵が起伏する広々とした平原で自動車を止め付近の地形を見ようとした時、二百メートルほど前方の道路脇に六、七十人の一隊が見えた。その一個小隊ほどの歩兵は道路上に又銃し、歩哨を立てて、朝飯の最中だった。

「どうも友軍らしくない」と気付いた時、先方も「敵だ日本兵だ！」とにわかにならわめきだした。

「おい、前は敵だッ、早く反輪（バック）しろ！」と言われて運転手は瞬時に神業ともいふべき早業で、車をバックした。敵は口々に喚声を上げ三、四十メートル近くまで迫ってきた。膝射の姿勢をとり銃をかまえた者もいる。

車は思い切りガスをふかし、ありつたけの力で突っ走る。「全く、えらい目を見たよ、まさかあんな所に敵がいよなんて夢にも思っていないかったからなあ……」いつの間にか部隊長も起きてこの話を聞き、「そいつぁ愉快だ」と爆笑した。

「愉快どころじゃありませんよ」。彦坂大尉は

苦笑いした。部隊長は昨夜までの高熱はどこへやら、今朝は全く素晴らしいご機嫌である。元気な顔色を見て一同やれやれと思った。おかげで全員が元気で晴れの「洛陽」攻撃に臨めることになった。

かくて洛陽は五月二十五日に陥落した。

【解説】

戦車第一師団は、昭和十七年六月二十四日に第一機甲軍が満州の四平街に創設されたことに伴って編成されたもので、師団司令部は寧安にあった。

戦車師団は当時、三個師団が編成され、同第二師団は北満のチャムスに、同第三師団は騎兵集団を改編して内蒙古の包頭に司令部を置いていた。いずれも対ソ戦に備えての配置であった。

第二次世界大戦の初期にドイツ機甲軍団の華々しい電撃作戦の戦果に鑑み、山下奉文中将（当時）を団長とした軍事視察団が陸軍の機甲化（機械化装甲）の研究のため、昭和十五年十二月より六カ

月間ドイツ及びイタリアに派遣された。

一方、昭和十四年五月より九月まで満州西北部のホロンバイル草原に展開された国境紛争があった。これはノモンハン事変といわれ、この敗戦結果が我が陸軍の機甲化促進の気運を高めた。

当時、それまで日本の師団は歩兵が主力で、火砲の運搬手段は輓馬^{ばば}あるいは駄馬^{だば}であったのに対して、ソ連軍の主要兵団は戦車で、砲兵も機械化砲兵であった。そして日本軍は常備編成に満たない兵力で圧倒的な機甲化された敵と対戦して敗れた結果、日本陸軍にも機甲軍が設けられることになった。

戦車第一師団の本来の任務は、ソ満東部国境正面に展開し、対ソ開戦の時期到らば国境線の堅固なソ連軍の縦深陣地を、あたかもクルミの実をノミで割るごとく速に突破し、沿海州及び浦塩港の占領のさきがけとなる重要な使命を持っていた。

しかし日本の戦車は米ソ軍の戦車と比較して装甲、火力、馬力共に性能の差が歴然としていた。

昭和十八年十月、第一機甲軍司令部は解編され、昭和十九年七月には戦車第二師団が比島ルソン島に派遣されルソン防衛に展開したが、昭和二十年一月九日、リングエン湾に上陸した米軍のM4シヤーマン戦車の装甲に、日本戦車の四十七ミリ砲では貫徹出来ず、敵の航空兵力の跳梁と相伴って逐次全滅の結果となった。

筆者の所属した戦車師団の防空隊は、一般の高射砲連隊と異なり、高射砲二個中隊（計八門）、機関砲四個中隊（計二十四個）、整備中隊一の編成で、戦車機動砲兵等の同行部隊の防空、掩護が主目的であった。

突如、低空で銃爆撃をしてくる敵戦闘機に対し、行進中でも速やかに車上放列を完了して、即時、対空射撃が出来る機関砲が必要であった。そしてこの防空隊は、昭和十九年三月、北支派遣軍の一号作戦（大陸打通作戦）発動により戦車第三師団に配属され、体験記のように河南作戦に参加することになった。